

寺田寅彦著「柿の種(Ⅰ)」岩波文庫、岩波書店 1996年4月16日刊を読む

棄てた一粒の柿の種  
生えるも生えぬも  
甘いも渋いも  
畑の土のよしあし

1. 日常生活の世界と詩歌の世界の境界は、ただ一枚のガラス板で仕切られている。  
このガラスは、初めから曇っていることもある。  
生活の世界のちりによごれて曇っていることもある。  
二つの世界の間の通路としては、通例、ただ小さな狭い穴が一つ明いているだけである。  
しかし、始終ふたつの世界に出入していると、この穴はだんだん大きくなる。  
しかしまた、この穴は、しばらく出入しないでいると、自然にだんだん狭くなって来る。  
ある人は、初めからこの穴の存在を知らないか、また知っていても別にそれを捜そうともしない。  
それは、ガラスが曇っていて、反対の側が見えないためか、あるいは……あまりに忙しいために。  
穴を見つけても通れない人もある。  
それは、あまりからだふとが肥り過ぎているために……。  
しかし、そんな人でも、病気をしたり、貧乏したりしてやせたために、通り抜けられるようになることはある。  
まれに、きわめてまれに、天のほのお焔を取って来てこの魔界のガラス板をすっかりと溶かしてしまふ人がある。 (大正九年五月、渋柿)
2. 宇宙の秘密が知りたくなかった、と思うと、いつのまにか自分の手は一塊の土くれをつかんでいた。そうして、ふたつの眼がじいっとそれを見つめていた。  
すると、土くれの分子の中から星雲が生まれ、その中から星と太陽とが生まれ、アミーバとさんようちゆう三葉虫とアダムとイヴとが生まれ、それからこの自分が生まれて来るのをまざまざと見た。  
……そうして自分は科学者になった。  
しばらくすると、今度は、なんだか急に唄いたくなって来た。  
と思うと、知らぬ間に自分ののど咽喉から、ひとりで大きな声が出て来た。  
その声が自分の耳にはいったと思うと、すぐに、自然に次の声が出て来た。  
声が声を呼び、句が句を誘うた。  
そうして、行く雲は軒ばに止まり、山と水とは音をひそめた。  
……そうして自分は詩人になった。 (大正九年八月、渋柿)

3. 根津権現<sup>ねづごんげん</sup>の境内のある旗亭<sup>きてい</sup>で大学生が数人会していた。  
夜がふけて、あたりが静かになったところに、どこかでふくろうの鳴くのが聞こえた。  
「ふくろうが鳴くね」  
と一人が言った。  
するともう一人が  
「なに、ありゃあふくろうじゃない、すっぽんだろう」  
と言った。  
彼の顔のどこにも戯れの影は見えなかった。  
しばらく顔を見合わせていた仲間の一人が  
「だって、君、すっぽんが鳴くのかい」  
と聞くと  
「でもなんだか鳴きそうな顔をしているじゃないか」  
と答えた。  
皆が声を放って笑ったが、その男だけは笑わなかった。  
彼はそう信じていたのであった。  
その席に居合わせた学生の一人から、この話を聞かされた時には、自分も大いに笑ったのはあったが、あとでまたよくよく考えてみると、どうもその時にはやはりすっぽんが鳴いたのだらうと思われる。  
……過去と未来を通じて、すっぽんがふくろうのように鳴くことはないという事が科学的に立証されたとしても、少なくとも、その日のその晩の根津権現境内では、たしかにすっぽんが鳴いたのである。

(大正九年九月、渋柿)

P10 ~ 15

### <コメント>

夏目漱石の第 5 高等学校時代からの一番弟子、日常の中の不思議を研究した物理学者の寺田寅彦の珠玉のエッセイ集「柿の種」。「なるべく心の忙<sup>せわ</sup>しくない、ゆっくりした時間のある時に、一節ずつ間をおいて読んでもらいたい」という願いの込められた味の深いエッセイです。是非、一度手に取りお読みください。

2021年8月6日(金)林明夫